

Title	稲上毅著 『現代社会学と歴史意識』
Sub Title	Takeshi Inagami, Contemporary Sociology and Historical Consciousness
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.7 (1974. 7) ,p.99- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評 本文の記述 : 福上毅著 『現代社会学の歴史意識』
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740715-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『現代社会学と歴史意識』

〔一〕

『思想』誌上で読んだ稲上さんの四篇の論文は、社会学を専門の業としない私に、鬼気としかいえないような気組みをもつて迫ってきたことを、私は今でも忘れないでいる。

私が稲上さんに圧倒されたのは、私がM・ウェーバーを、いわば心情的に理解してしまつていて、稲上さんのように全人格的にぶつからなかつたからに違いない。もう一つは、私が政治学の勉強をはじめたところで行き当つた学者たち（たとえばS・M・リップセツト、G・A・アーモンド、D・E・アプターなど）が、T・パーソンズの社会学の方法を何らかの形で踏まえることでウェーバーに接続していた。そのウェーバー理解（稲上さんの表現をかりればウェーバー・イン・パーソンズ）が、どうも腑に落ちないと小首をかしげながらも、パーソンズに分け入っていないこともあるはずである。

だから、稲上さんの論文集が出るということを聞きこんだ時、これを機にパーソンズがどのようにウェーバーをとりこんだのか、そしてパーソンズをフィルターにして、アメリカの政治学者たちがヴ

エーバーをどのように誤解したかを確かめてやれ、と思つたのである。

この私の望みはある意味では果たされた。それは第一章「パーソンズの歴史意識」、第二章「パーソンズによるウェーバー」理念型』批判をめぐつて」が、雑誌でポツポツ読むのと違つて読み通せることでパーソンズの認識枠がつかめたからである。しかし、稲上さんが「高度な」知識やその体系を：「限界だらけの生身の人間という角度から見直すこと、そして知識の生産者という側面からばかりでなく、広くその生産過程やさらに流通過程という、観点からも人間の知識というものをとらえ返す」（頁・傍点）内出）作業を重大とされ、その作業を第三章から第七章まで、いわばご自分が必然的に担わねばならなかつた形で問題意識を明らかにされたのを見せられると、これはもう書評どころではなくて、フォローし感嘆するだけで読み終えるほかしかたがなかつた。

「抽象的な思惟がただ宙を舞うというのではないにも情無い……日本や世界の現状は、悠長な「待機」策を許さないのではないか」（iv頁）と稲上さんが焦燥なざる、それは分るにしても、稲上さんのこの書物には、ただ宙を舞う抽象的思惟などは片鱗もないことだけは確かで、この儘ですつしりと持ち重りのする内実があることだけは、この素人にも実感できたことを申しあげておきたい。

〔二〕

『近代的自我』の確立とそれを拡大再生産し、同時にそれによつ

て基礎づけられる「人間的自然」の解放を目標とする、新しい生きゝとした「人間共同存在性」の追求、——これこそ、私は社会学というディスプリンが追い求めてきたし、いままた、新しい現代社会の諸状況のもとで問い返されなくてはならないテーマ、ちよつとやそつとで、手におえそうなものではない大テーマですが、しかし「時代のテーマ」であると言つてよいのではないか（二三〇頁）と稲上さんは告白する。

この「告白」は第五章「社会学的機能主義の展開」の補論I「ヴェーバーからパーソンズへ」の全部に、知的に息づいている。この補論は、専門家はいざ知らず、私には本書理解のための分水嶺として最初に読むべきところであつた。というのは、稲上さんご自身がかかわり、それによつてご自分を立たせている問題の所在が手にとるように、ここで語られているからである。すなわち、その問題とは「パーソンズ社会学といわれるものの思想なり理論なりの形成や発展にとつて、ヴェーバーという学者がどのような形で、面的に「撰取」され、したがつてどの部分が面的に切り捨てられていつたのか。パーソンズによるヴェーバーの「批判的」撰取と申しますか、パーソンズによるオリジナルな「再編成」のメカニズムに焦点を絞つて考えてみる」（二〇〇頁）ことにはかならない。

この問題意識はパーソンズを三期に見据えることで開始される。第一期ではパーソンズがそれまでのアメリカ社会学の主流であつたシカゴ学派が対象としたアメリカニズムとしての「近代」社会問題に対する具体的・個別的な調査分析の視角から離脱し、ヘホップズ

的秩序のないし「ヘスペンサーの死」を認識前提としてもつていること、第二には、歴史的進化・発展にたいする反撥、マルクスを含みこんだ意味での「歴史主義」の否定があること、第三には古典経済学にたいする徹底的な批判が明らかにされる。

さらに加えて、パーソンズの科学論——パーソンズ理論の「下部構造——が演繹的、一般理論への自己要求にあり、それが古典経済学批判を通じて人間行為の一般理論の追求となつて表出してくる。

「そういう作業を経ずに『歴史主義』であるとか、あるいは、さまざまな類いの『経験主義』であるとかいうものはいりこんでくるところに、科学の進歩がいわばストップされる」（二〇六頁）と読んでゆけば、パーソンズの「出发点」はつかめる。もちろん、ここでパーソンズが、人間行動が自立的な社会的諸力によつて翻弄されるような「状況」の資本主義社会における克服可能性の点で、ヴェーバーの悲観とは違つて、樂觀的であつたことは重大である。「そして問題は、資本制社会の下での、いわば『疎外された』（?）状況の超克を担いうるような人間像の彫琢という方向が重要視されていつて、その帰結として、かれの「主意主義的行為理論」が生み落されていく、こういう過程を辿る」（二一〇頁）と明らかにされるのである。

この初期パーソンズに特徴的な「人間行為の一般理論」としての「主意主義」的把握には、目的論的な理解が基礎になつている。その場合、主意主義的行為理論の構造的要素は、目標、手段、条件、それに規範であつて、これらの関連づけによつて行為の規範的オリ

エンターション(目的論的な性格)が基調として貫通している。換言すれば「四つ」の「構造的要素」からは、一定の『状況的与件』の下で、一定の『理想』を志向し、ある『目標』を一義的に設定して、その『目標達成』に適合的な『手段』を選択しなから行為する、そういう人間像がむしろ基調をなすものとして浮び上がつてくるといえる(二二頁)。

この原型パーソンズは、稻上さんによつて、知識心理学的に発掘された上で再構成されているだけに非常に面白いといえる。私はパーソンズに関するこの種の〈発掘と再現〉がどこまで果されているのか、その作業量を知らないのも何もないが、一九三〇年代アメリカの精神風土がこの偉大な社会(科)学者の知性史にまさりてと見てとれるのが何より興味深い。しかし、こんな私の想いはどうでもよい。

第二期パーソンズは、『社会学における体系理論の現状と見直し』(一九四五年)、『社会体系論』(一九五一年)、『経済と社会』(一九五六年)を突出させた約一〇年間である。ここでのパーソンズの理論を構成する諸要素は、(一)「目的―手段」連関の図式から「行為者―状況」の分析図式へという質的な転換を内的にとげた意味で、第一期のそれとは異なる「人間行為の一般理論」、(二)「構造―機能分析」の定式化による理論形成、(三)「動的均衡」論に支えられた「社会体系」論である。

稻上さんの「ヴェーバー・イン・パーソンズ」からすると、『ヴェーバーがマス化とビュロクラシー化状況の超克という現状批判

的な問題意識のなから、『理論的下部構造』の領域に大きくは属していたかも知れませんが、あの〈友愛倫理〉に赴くことを考えますと、〈非合理的合理化〉と「変革の社会学」がヴェーバーの基盤にあつたのに対して、パーソンズは、極論すれば「合理的合理化」と「秩序形成の社会学」といえるほどのちがいが、両者の間に横たわつているといえるのではないか(二二六頁)ということになる。

この社会変動論における基礎認識の差に加えて、パーソンズが、構造―機能分析の系譜を辿り、フロイト(グループ・ダイナミクス、心理学、マリノフスキー(社会・文化人類学、デュルケム、M・ヴェーバー)にそれを採し当てている点、とりわけ「ヴェーバーによる比較制度論的分析の取扱い方が、社会システム論の『構造―機能分析』の方法である」(二二五頁)と指摘されると、政治学者とりわけ政治社会学者が「撰取」した「ヴェーバー・イン・パーソンズ」は、ヴェーバーとなお連結しながらも、最も疎遠なところにいる。そのパーソンズにヴェーバーを見た、ということが判明してくる。

一九六〇年代の第三期パーソンズに特徴的なのは「歴史意識」の明確化であると指摘される。それには予定調和のアメリカン・ドリームがいやでも醒めねばならなかつた〈悩めるアメリカ〉が背後にある。したがつて、歴史意識が鮮烈にでてくるという意味では、パーソンズにおけるヴェーバーの再生に違いないが、パーソンズが進化論的視角を導入することでヴェーバーと異質な「意識」を展開してくる情況がとりあげられる。すなわち、稻上さんの表現をかりれば、〈混合体制〉論、工業化にもとづく「収斂理論」、四つの「進化

的普遍性」論——①「集合的目標達成の官僚制的組織」、②「貨幣市場体系」、③「一般化された普遍主義的法体系」、④「民主的アソシエーション」といつたものによつて、現代社会を發生史的に与らえなおしてゆこうとするパーソンズが指摘される。

このような素描をたした後に、稻上さんは、パーソンズの理論的「下部構造」を、パーソンズとヴェーバーの「パーソナル・リアリティ」に追体験的にとらえ、一種の比較を試みながら両者の落差を明らかにする。そして「下部構造」理解の視座である三つの観点、人間・社会・歴史のとらえ方の違い、方によつて、それぞれの学問的管為への反映をとらえ、「パーソンズとヴェーバーの間には、その理論的『下部構造』にまで立ち入つてみまずと、単に質的な落差があるというだけでなく、むしろ『対抗関係』がはっきりとある」(二三四頁)ことを確認するのである。

稻上さんのパースペクティブはここでは終らない。彼はパーソンズ社会学の日本社会学における受容にまで目配りをするので、単に日本社会学史ばかりでなく、日本人研究者の理論的「下部構造」を析出しようにとし、そこに一種の「日本人の精神構造」論の試みを提出しようとする。そこには、高田保馬博士の社会学批判という共有された「場」による稻上社会学の主張も含まれる(補論Ⅱ「高田社会学の理論的下部構造」がその〈問題〉に充たされている)。

さらには、「現代社会学の新しい『地平』」を示唆して、次のような指摘が行なわれていることが目につく。すなわち、「既成態への屈服と〈没意味化〉という基調を帯びた、ポジティヴィズムの地平

を一段掘り下げてみて、そこで、どのような人間存在の原像、人間的自然の原型を構想し、先取りしていきけるのか、こういう問題意識が底流として動き出している」(三一九—三三〇頁)という指摘である。この問題意識が第Ⅱ部「社会計画—制度形成論」を貫通し、その最初の手がかりとして、第Ⅰ部「方法意識と歴史意識」に属する第七章にしばしば言及されるK・マンハイムの「媒介原理」論(第六章)の析出となつて間然するところがない(私が補論Ⅰ「ヴェーバーからパーソンズへ」をもつて、稻上さんのこの書物の分水嶺としたのは、実はこうした稻上さんの理論的立論の連関性をいたかつたからである)。

すでに紙数が尽きようとしている。だから、「認識論に絡んだ『方法意識』の局面」と「現代社会の趨勢的傾向を照しだす『歴史意識』との二つの文脈のいわば、結節点としての、『媒介原理』の今日的意義をマンハイムを媒介にして追い求める稻上さんが、〈動的宗教〉の三つの社会機能(一)過渡期の社会を診断すること、(二)重要な問題に注意を焦点づけること、(三)社会生活のいろいろのレヴェルで人間を統合すること)で断ち切れてしまったマンハイムを、〈理想主義的的社会革新型社会計画〉によつて組み入れようとする意図は厳しくもまた壮大である(第七章「制度形成と社会計画」)。そして、「この『理想主義的』社会革新型社会計画論の背景には、いわゆる『ヘイデオロギーの終焉』(D・ベル)とひきかえに人間の自由な構想力の飛翔が必要不可欠な前提となつている」(三三〇頁)と指摘するその稻上さんの構想力のさらなる展開を切望するのは私だけではない。

〔三〕

へヴェーバー・イン・パーソンズ」を教えて貰おうと思つて読み始めたのが、稲上さんの情熱と論理にひつかかつて、はじめの意図を途中で放棄してしまつたのに、読み終つてから気がつく有様であつた。もちろん、私の意図は十二分に果たされたのだが、私には「地上の餌をついばむだけの実証主義」を一方では盛行させた現代政治学の悪しき経験主義ばかり見えて、その元兇がへヴェーバー・イン・パーソンズ」にあると想つていた、そのことが一面では正しくとも、他面では現代政治学者の怠慢以外の何物でもなかつたことを、いまはつきり知るのである。

同時に、政治学における新しい革命が、方法意識（それは確實に方法論的個人主義を内在化させる）と歴史意識の結集の原点を探し当てる点に目をこらしており、したがつてマンハイムがいつた「思弁的方法と経験主義的方法の統一」に新しいパラダイムを探り当てる作業を開始していることを思いあわせるならば、稲上社会学はまさしくわれわれに問題の所在を教え、解決の方向を可能に示唆しているといえる。

だがわれわれの問題には、たとえば正当性と合法性の合体と離反、生活形態としてのデモクラシー、人間の営為としての政治における伝統と革新といった視座が残つており、さらには一番やつつかいな国家と共同体の問題がもう一つその上につかつている。もちろん稲上社会学は、言葉の真の意味でヴィッセンシャフトに違いない

から、第七章付論で示されたような「市民運動」論のデッサンで提示されているところで、われわれと必ずクロスしてくることを予想もし楽しみにもできる。

ともあれ、私にとつては、少なくとも自分の間は、この書物は、一つの新しい局面を教示してくれ、さらに私の向学心をあおり、またやる気をおこさせてくれるものであることは間違いない。現代の政治学の覚醒に資すること大なり、とのべて終ることにしたい（A5版・三四八頁。木鐸社・一九七四年刊、二五〇〇巴）。

内山秀夫